掲載日:2015年11月13日，面名:暮らし家庭，記事ID:KIJ20151113_01018000101506001
(C)下野新聞社

乳がんリスク下げるには

検診重ね早期発見を

関口（せきぐち） 忠司（ちゅうじ）

【Q】60歳女性。母親が乳がんでした。私もそうなるのか、毎年の乳がん検診だけで大丈夫なのか心配です。更年期でホルモン補充療法中ですが、続けてよいものか悩んでいます。

【A】国立がん研究センター発表の「2015年のがん統計予測」によると、女性のがん罹患（りかん）数（新たにがんと診断される数）の中で乳がんはトップです（図）。また、生涯に女性が乳がんにかかる率は12人に1人の割合でした。

多くの研究をまとめた検討では、親、子、姉妹が乳がんの場合、そうでない人に比べて2倍以上なりやすいことが分かっています。

しかし、乳がんを早期に発見して治療した場合、9割以上の方が10年後も生存され、発見が早いほど治療の選択の幅も広がり、入院期間や再発防止の治療期間なども短いので経済的負担も軽くなります。

乳がん検診に関しては、40歳以上の女性に対してマンモグラフィ検診を行うことにより乳がんによる死亡の危険性を減らすことが証明されています。検診はしこりとして触れる前の早期乳がんを発見できる可能性がありますが、限界があり、描出できない乳がんもあります。

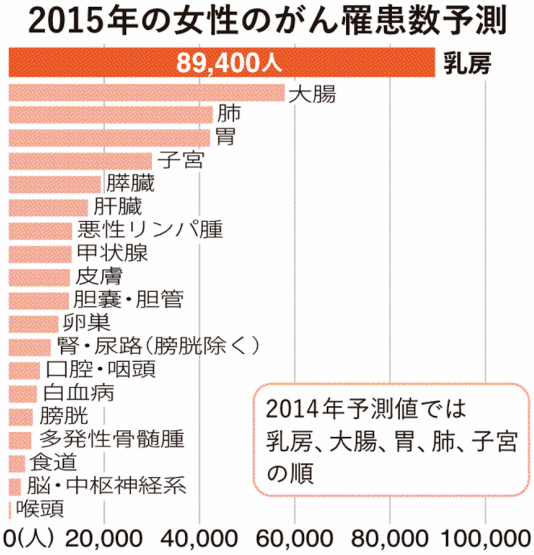
検診で異常なしであっても、毎月自己検診（鏡に向かって変形、左右差を見る。しこりがないかどうかを渦を描くように指の腹で探す）を行って異常を感じたら次の検診を待たずに医療機関を受診してください。

更年期障害の治療に用いられるエストロゲンとプロゲステロン（プロゲスチンなどの黄体ホルモン）を併用するホルモン補充療法により、乳がん発症リスクはわずかながら高くなるとされています。ただし、ホルモン補充療法が乳がん発症リスクを高める程度はわずかなので、使用することによる利益とのバランスを含めて主治医の先生とご相談ください。

日本乳がん学会は「患者さんのための乳がん診療ガイドライン」をインターネット上や書籍として提供しています。今回の答えも最新の14年版に準拠しました。ご利用ください。

（第2、4金曜日掲載）

南那須医師会理事。那須南病院（那須烏山市）統括管理監。自治医大卒。62歳。



ドクターへの質問を募集します。お寄せいただいた中から毎月2件、紙面で回答します。病気の症状や経過などをなるべく詳しく書いてください。名前（匿名可）、年齢、性別、連絡先（住所、電話番号）を明記し、〒320−8686、下野新聞社くらし文化部「健康よろず相談室」係へ。住所不要。FAX（028・625・1185）、メール（dotto ko@shimotsuke.co.jp）でも受け付けます。